



生活に生きる 「話し合い活動」

提言

「話し合い」が生きる授業づくりへの三つの問い

信州大学教授 藤森 裕治 ふじもり ゆうじ

「話し合い」はなぜ必要か

私たちの生活は話し合うことなしに成り立たない。家庭や学校はもとより、サークルや自治会、企業や団体など、人々が共同で何かをする場には「話し合い」がつきものである。民主社会の規則やルールは、その社会に組み込まれた人々の「話し合い」によって作り出され、見直され、ときには廃止される。「話し合い」によって、私たちは自分の考えを届け、相手の考えに耳を傾け、互いの共通点と相違点を知り、ものごとを決めたり知識を広げたりする。この能力において、人間はほかのあらゆる動物と二線を画している。

周知のように、平成二十二年五月二十二日から裁判員制度が始まる。この制度では、一般市民が務める六名の裁判員と三名の裁判官とによって被告の有罪・無罪を判断する。有罪の場合は量刑まで決めなければならない。そのプロセスは「話し合い」によって進められる。石垣明子教授（つくば国際大学）によれば、一生の間に、国民の六七人に一人が裁判員を務めることになるという（『その国語力で裁判員になりますか』入部（石垣）明子著／明治書院）。そういう時代に「私は『話し合い』が苦手です。」などと言っているわけにはいかないのである。

新しい学習指導要領（中学校「国語」）でも、相手の立場を尊重して話し合い、互いに合意形成をはかる力の育成が示されている。

実社会のさまざまな活動に参加する力を育てることの重要性が、より強調されている。子どもたちが社会人となる頃には、適切に話し合う力が市民として必須の条件となる。

よい「話し合い」とはどんな「話し合い」か

各地の国語教室を訪問して、充実した「話し合い」の場面に居合わせると、心が躍る。よい「話し合い」の発言数は、必ずしも多くない。いやむしろ静かですらある。ただし、穏やかなやりとりの中で、次の三つの事柄が守られている。

(1) 公平・対等の関係で互いにつながっていること
さかんに意見が飛び交うわりに、むなしき空気のただよう「話し合い」がある。そういう「話し合い」では相手の考えにまるで関心を示さない参加者が目立つ。よい「話し合い」では、参加者全員が公平にかつ対等にかかわっており、温かな安定感がある。何のために話し合うのかという目的がしっかりとえられている。力を合わせて結論を出したり知識を豊かにしようという自覚で、全員がつながっている。

(2) 級友の言葉を受けとめていること
よい「話し合い」では「さっき、〇〇さんが……と言っていました」という発言がたいへん多い。さらに高度な「話し合い」では、司会者以外の参加者が「これまでの意見をまとめると、大きく三つにまとめると思います。二は……」などと発言して、自ら議論の流

れを整頓してくれる。相手の発言を「つまり……ということですね。」といった言い方で、手短にまとめることもできる。

(3) テーマやルールについてブレがないこと
よい「話し合い」は、テーマやルールについてしっかりと共通理解がなされており、ブレがない。だから、「流行語について考える」というテーマなのになぜか「敬語の乱れ」が取り上げられているとか、A案について話し合っているのにいつの間にかB案についての議論になっているといった事態が起きない。

これらの事柄がしっかりと守られている「話し合い」をよく見ると、「話し合い」を中心的に進行している生徒はさることながら、フロア（聴衆）としてその様子を観察している生徒たちも猛烈に頭を回転させていることに気づく。今ここで練り広げられている「話し合い」を追いながら、論旨に矛盾がないか、話題についてどこまで理解が深まったのか、対立する意見の共通点はどこにあるのか：等々、忙しく考えている。こういうとき、彼らの顔は紅潮しているのですぐにわかる。

「話し合い」学習の難しさを克服するにはどうしたらよいか

「話し合い」学習を取り入れたいとは思いますが、あの生徒たちには無理だという嘆きをしれば聞く。実際、中学生の多くは、人前で自分の意見を堂々と発表したり、侃々諤々

の議論を楽しんだりすることが苦手である。けれども級友の考えを聞いたり、身近で具体的な問題をあれこれ考えることは、案外好きでもある。このような生徒たちには、実際に行われた「話し合い」の記録を見せたり、シナリオを使って役割演技をさせたりするとよい。映像資料で「話し合い」の記録を見せるときには、適当な場面で映像を一旦停止の画面にしなから、そのルールや注意すべき点を説明する。シナリオを作って実演してみる場合もこれと同様である。

「話し合い」学習を取り入れる意義は認めるが、評価の仕方がよくわからないという声もつねづね耳にすることだ。この悩みは、「話し合い」学習で評価されるべき対象を間違えているために発生することが多い。「話し合い」学習の主役は話し合う当事者ではない。教室において「話し合い」の模様を観察する生徒たちである。詳細は拙著『バタフライ・マップ法』（東洋館出版社）を参照していただきたいが、状況依存的で過性の「話し合い」を、やり直しのきかない状態で進行する当事者たちは、「話し合い」学習のいわば「教材」である。問題は、その「教材」からフロアの生徒が何を学ぶかにある。今行われている「話し合い」のどこが上手でどこに改善すべき点があるか、この「話し合い」によってどんな目的が遂行されどこに合意がみられたのか。こういう問いをフロアの生徒たちに投げかけ、

彼らがこの「話し合い」からどの程度のことを学んでいたか評価してほしい。「話し合い」がつたなく終わったからといって、「所懸命発言した生徒をA・B・Cなどで冷たく査定することをされると、「話し合い」など二度としないと感じる生徒がきつと出る。

では、「話し合い」を即興的かつ適切に進める力そのものはどう評価し身につけさせるか。詳細は拙著に譲るが、この力は「話し合い」を展開している共同体の力であり、個別の能力には還元できない。それを教師が評価するとしたら、まずは集団を二つの人格とみなして行うべきである。個別には、自己評価力の育成を重視する。自己評価力とは、「話し合い」に自分はどの程度参加しているかを省察する力であり、共同体のよりよい一員となるために必須の能力である。ただしこの力を得るには、「話し合い」の当事者経験をできるだけ多く積む必要がある。当事者経験が十分になれば、よいフロアにもなれない。

要領さえわかれば、生徒たちは「話し合い」にわりとすぐに慣れる。そして、この問題にはどんな「話し合い」がよいかを話し合うようになる（こういうのをメタ議論という）。数多く「話し合い」を経験すると、生徒たちはこれを言語生活の一部として、当たり前のように行うはずだ。そうなった教室に足を運ぶ教師は幸せである。

話し合うことを楽しむ国語の時間（二～三年）

— グループ学習を核に話し合う態度と力を育てる —

新しい指導を考える会

授業中の話し合いが楽しい

ノートを取るのが大変だったけれど、期待通りたくさんの意見が出てすごく面白かった。一つの文章について、こんなにも深く読むことは少ないので、私はこういう国語の時間が好きだ。自分が思い浮かばなかった考えも知ることができ、とても良かった。

これは、今年五月に小説作品を読んだ授業について、ある生徒が書いた「学習のまとめ」の一部である。話し合ってたった、深まった経験が、話し合う効力感や「また話し合いたい」という思いを引き出し、そして「本気で話し合う経験」の中でこそ、「話し合う力」は育つ。では、どうしたら話し合いが楽しく、活発なものになるだろう。わたしは、まず次の二つを大切にしたいと考えている。

話し合う目的と目標がはっきりすること

話し合いには必ず目的がある。その目的が生徒にとって内発的で必然性があるとき、話し合いはホンモノになる。そしてその目的につながる具体的な達成目標がはっきりすることです。

■「今日の進行役」 — 司会する力を育てる —

グループによる話し合いの人数は常に三～四人。必ず「今日の進行役」を置く。進行役は授業ごとに「巡して全員に繰り返し経験させる。例えば導入期の指導は次のように進める。

- ① 学習課題や話し合いのテーマを学級全体でつかむ。自分の考えをまとめる時間をとる。そのあとでグループ学習。
- ② 進行役を決めて、前に集合させる。
- ③ 進行役だけに、目標と手順、話し合いのポイントを指示。
- ④ グループに戻らせ、②を説明したうえで話し合いを始める。
- ⑤ 話し合い後はグループの成果を発表し合い、学級全体でさらに話し合ったうえで、各自の考えをまとめさせる。

進行役だけに指示を与えるのは、グループの中でのリーダーシップ経験を確実に持たせるためである。進行役に示す「手順」は、例えば「①各自の考えを巡発言する。②発言を聞いて進行役が考えた共通点や相違点を整理。③話し合って深める。④発表内容を確認。⑤発表者を指名。」のように具体的に伝えていく。「話し合いのポイント」としては、話し合いの内容や指導の時期、生徒の実態などに応じて、例えば「発言の少ない人に発言を促す」「行き詰まったら、出た意見をまとめ直して感想や気づきを求める」「別の立場の意見を予想してみる」などと進め方を示したり、発表の仕方として「結論がまとまれば良い。まとまらない場合は、『こういう意見とこういう意見が出て、こういう点で対立している。他班の意見を聞きたい。』という形でもよい。」などと指示したりする。

生徒たちは方向性をもって自発的に話し合い始める。

他者との違いに学び合い、自分の考えを大切にできること

持つている情報の違い、見方や考え方の違いなど、他者性の発見が話し合いの原動力になる。そして、認めたりぶつかったりして話し合った結果を、「自分はこう考える」と最後は自分に立ち戻って結ぶこと。「こう」の自身は、一定の「合意点や一致点」であったり、「ここは違うという再確認」だったりする。そのどちらも認め合えることが、自尊感情を高め、自立した話し合いの担い手を育てていくのだと考えている。

話し合いを育てる — グループ学習の指導を例に —

こうした考え方を背景に、話し合いを楽しむ国語教室を作っていくために、わたしはグループで話し合う学習の機会を、日常的に取り入れていくようにしている。話し合いの力をより実践的なものにしていくには、「自分⇄小集団⇄大集団」という行き来を通して話し合いを育てていくことが大切になる。その土台になるのが、グループ（小集団）の話し合いである。

■互いの考えを可視化する工夫

話し合いを活発にするうえで、互いの考えを目に見える形にする（可視化する）工夫も大切である。お互いの考えが「検討可能な対象」になったときに、話し合いは討論へと質を変える。可視化の手立てはさまざまに工夫できる。互いの考えを画用紙などに書いて並べるだけでも効果的だ。そのうえで説明し合えばプレゼンテーションの指導とも関連づけられる。また、考えを付箋紙やカードに書いて可視化し、それを分類したりまとめたりすると、その過程で話し合い活動が活発になっていく。

■「聴き型」の指導を組み入れる

グループでの話し合いを高めるうえで欠かせないのは、「聴き型」の指導である。小学校ではよく話型指導を行う。「〜と思います。なぜなら……」のように話す型を示して、慣れさせする方法だ。これを聴き方の指導にあてはめて、「〇〇ってどういう意味？」「△△といえる理由は？」など、他の発言を考えながら聞く「聴き型（方）」を、先に示した「話し合いのポイント」の中などで具体的に指導していくと、話し合いの質を高めるのに効果的である。





話し合いのコーディネート能力を高めるために（二年）

新しい指導を考える会

「話し合い指導」でつけさせたい力とは？

○多数決を超えられる力

「話し合い指導」をする目的は、多々あるが、わたしは、第一に多数決を超えられる力を育成することだと考えている。

生徒たちは何かを決めるときに、安易に「Aがいい人？」などと言って手を挙げて決めがちである。もちろん、現実には多数決が必要な場面は多いが、自分を前面に出して摺り合わせることを避けようとする傾向が強いのも事実だろう。

○コーディネーターとしての能力

実生活の場面では、どうしても自分を出さざるをえないので、むしろ、授業のような「技能を育てる場面」で、ある意味気楽に、多数決でない話し合いの経験値を高めることが必要だ。

それが、生徒一人ひとりに、みんなで意見を出し合って、聞き合って、調整して決めて実行していく、いわばコーディネーターとしての力をつけることにつながるからだ。

基礎的な技能（前段の指導）

「話し合いの授業」は二朝二夕には実現しない。いくつもの基礎的な技能の高まりや、教室のレディネスが必要だ。

日常行っている基礎的な指導を以下にいくつか挙げる。

・スピーチ（根拠・理由を前提として意見・主張を述べる）

最初は短い文章を読ませ、各意味段落から「キーワード」を探させる。そのキーワードを元に「箇条書き」に整理するやり方を教える。合わせて「ナンバリング」という言葉も定着させたい。

2時の後半に、「聞いてメモする」作業をさせる。

プリント（下段資料）の「授業の進め方」欄1番を教師が音読し、各自それをノートにメモする。（下段資料「メモの取り方」欄参照）

そのメモを元に、プリントに「他人に渡すメモ」を作成させて提出させる。その場ですぐ採点する。

採点のポイントは「箇条書き」「キーワード」「見やすさ」である。満点が多くなる方がよい。2番も行う。

第二次（3、4時）

今次の目的は、メモ完成のために話し合わせることである。

3番を教師が音読して、各自がノートにメモした時点で、班で話し合いを始める。「お母さんにメモして渡す」前提で、どう書けばいいのかを話し合わせる。（六班編制）

話し合ったそばからホワイトボード（50cm×80cm程度）のもの。常備しておくと重宝である。）に書いては消し、書いては消しを繰り返しながら、完成させていく。

教師が各班を回って、「これは見やすいねえ。」「キーワードが短くていいねえ。」などと、「意識させたい事項」を、みんなに聞こえるようにアドバイスしていくと、それをヒントとして手直しする班も増える。

時間制限をして、六班分のホワイトボードを黒板に貼らせる。「見やすさ」「正確さ」「キーワード」「伝わるかどうか」の四点で、ある部分は教師が採点し、ある部分では生徒の意見をもらって採点していく。

以下一時間半かけて、4番、5番とやっていく。

・人前での音読の習慣化（たけのご読み、指名なし音読など）
※たけのご読み：一つの作品を音読する際、自分が読みたいと思ったところで起立して読む。だれも読まない文は教師が読む。

・班での話し合いの習慣化（伝言ゲーム、論理パズル、脅迫状ゲームなど）

・ダイバート（班対抗やマイクロダイバートなど）

・答え方指導（読解などの授業の中で、班ごとの話し合いの場を設ける。その答えをホワイトボードに書いて提出する。）
これらの小さな実践を経ることで、生徒に「人前で発表すること」や「話し合って何かを決めること」を「当たり前に行える」ようにしていくのが、話し合い指導の前段階である。

実践報告（4時間扱い）

■指導の目標

- 1 聞いた内容を端的にメモする技能を高める。
- 2 班で話し合うことによつてよりよいメモを作成する能力を養うとともに、他班のよさを学び合う姿勢を高める。

第一次（1、2時）

今次の目的は、メモをする技能を向上させることである。

まず1時から2時の前半にかけて、「箇条書き」「ナンバリング」の指導をする。

4時後半では、「メモを元に話し合つて元の文を書く」という課題をバリエーションで入れる。

■指導の発展性

「話し合い指導」は、「読むこと」「書くこと」の指導と不可分の関係にある。例えば、以下のような学習から、「話し合い指導」に発展していく。

・「少年の日の思い出」でエッセイの人物論を話し合う。

・「文化を伝えるチンパンジー」で日本独自の文化と外来の文化を調べて発表し合う。

・「メディア社会を生きる」で、修学旅行の写真をもとに、どの写真を選んだらよりよい新聞が作れるか話し合う。

資料

1年話す聞く（メモ作りの話し合い）授業メモ 07/1月

メモの取り方

- ・メモは箇条書きでとる。
- ・早くメモするためにひらがな・カタカナ・数字を使うとよい。
- ・提出する時は、見やすく書き直して出す。
- ・すぐれているのは短くて意味のわかるメモである。

授業の進め方

- ・先生が伝言を読み上げる。それをメモにする。
- ・1～2は全員がメモして、紙に書いて提出。先生が採点する。
- ・3～5は全員がメモをとり、それをもとに班でホワイトボードに書いて提出する。
- ・ホワイトボードを黒板に貼る。どのメモが優れているかみんなで採点する。
- 1 明日2/15（木）の連絡です。1時間目が社会から国語に変更です。間違えないようにして下さい。
- 2 もしも、浅間です。今すぐ雨が降っていますが、明日も大雨の予報が出ているので、明日の体育祭は延期と決まりました。明日は授業になります。火曜の時間割りを持ってきて下さい。
- 3 みなさまにスーパー大矢部から、お得な大売り出しのお知らせをします。今日だけの特別サービスです。しょうゆ1本で¥100、砂糖1袋で¥120、かつおぶし10パックで¥80にてのご提供です。売り切れ次第終了となりますので、お早めにお越し下さい。スーパー大矢部からのお知らせでした。
- 4 えーと、注文がいいですか？じゃあ、言いますね。はい、ほくたち4人です。順番に言いますよ。
 - ① エビフライ定食、飲み物はウーロン茶をお願いします。
 - ② オムライス、トマトサラダ、飲み物はいりません。
 - ③ カツカレー、飲み物はコービーで。
 - ④ ミートソーススパゲッティにしようかな、いや、やめて、ハヤシライス。あとトマトジュース下さい。
 - ⑤ あ、すみません、さっきのトマトサラダやめて、イタリアンサラダに下さい。はい、じゃあ、以上です。
- 5 本日2/15の朝、国道16号線で、交通事故がありました。横須賀警察署のすぐ近くの事故だったということもあり、その場で警察が対応しました。警察の調べによりますと、朝4時頃、国道16号線横須賀中央付近を走っていたトラックが軽自動車に追突したということです。原因はトラックの運転手の居眠りによるものと思われるということです。トラックの運転手にはケガはありませんが、追突された軽自動車の後部座席に乗っていた女性が全治2週間のケガで近くの病院に入院しましたが命に別状はないということです。事故の影響で、横須賀中央付近は車が渋滞しているようです。

言葉の力を贈り合う「話し合い」
(二～三年)

新しい指導を考える会

教師の意識改革

「話し合い活動」について改めて考えてみたとき、わたしにはこんな疑問が生じた。「話し合うのが楽しい」「これは絶対に話し合わないといけない」、そんな話し合いを、生徒に体験させてきたらどうか。また、教師が、生徒の話し合いを楽しんできたのだろうか。答えは「否」であった。そこで、まず、話し合いに対する意識を左記のように変えようと考えた。

「話し合い」は、互いの言葉の力を贈り合う、楽しい活動である。

そして、話し合いを、次の視点でとらえ直した。

・相手の立場を尊重する

相手の意図を考えながら、注意して聞く。相手の反応を踏まえながら、分かりやすく話す。

・目的（合意形成）に向かうことを意識する

問題意識、当事者意識をもち、互いに協力しながら、目的（合意形成）に向かうっていく。

・言葉にこだわる

話し合いの中で言葉とかわる過程を大切に。心をこめた（情意、情緒を大切に）、力ある言葉（説得力のある、自分なりの表現）を贈り合う（言葉を贈るだけではなく、相手の言葉を感じながら受け取る）。

生徒たちの意識改革を図る方策

生徒たちの意識を「難しい」「つまらない」から「楽しい」

い「いいね、生かそう（これからの話し合いに生かす）」

う「うん、わたしも（共感・同感）」

え「えっ、どうして（疑問）」

お「おやつ、そう（わたしとは違う、差異）」

※公的な話し合いでは、たとえば、「うん、わたしも。」が「はい、わたしも同感です。」になることを指導する。

■相手を尊重していることを表す表現

・「なるほど」で受け止めてから反論する。

（例）「なるほど。でも、～ではないでしょうか。」

・「あなた（相手）」を先に述べる。

（例）「あなたの意見は～。わたしの意見は～。だから、～という意見でどうでしょうか。」

「あなたは～だろうけれど、わたしは（わたしも）、～。みんなは～ではないでしょうか。」

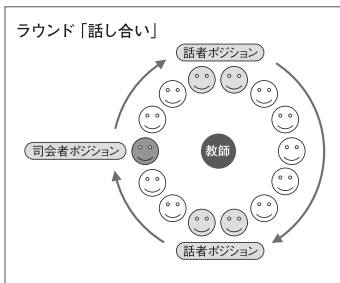
■多様な「話し合い」形態

・ペア・3人（話者2対1、もしくは、司会者1、話者2）
・4人グループ・8人グループ（4人グループ×2）・ABグループ（学級を二分）・学級全体

※話者2対1：社会生活では、一人で複数と話し合う（人数や立場がアンバランス）場面がたくさんある。多様なポジション体験を積むための形態。

・ラウンド「話し合い」

学級全員（もしくはグループ）がラウンド（円）になって時計回りに動きながら行う「話し合い」。司会者、話者ポジションについていたときに、司会者、話者として話し合う。ポジションがないときはフロアとして話し合いを聞く。ここ



に変えるために、次のような方策を実践している。

■合意形成を促すテーマ設定

中学生にとつて関心、有実感、必要感、切実感のあるテーマを設定し、合意形成を促す。また、三年間の中で系統性をもたせることによつて、話し合いがステップアップしていくことを目指す。

一年【日常生活】給食・ベストメニュー、校内ボランティア企画、遠足先（遠足に適した場所はどこか）

二年【社会生活】郷土食ベストメニュー、地域ボランティア企画、修学旅行先

三年【社会生活・敬語】日本食メニュー（自給率三十%以上にするためにはどんなメニューが考えられるか）、日本全国ボランティア企画、町内会旅行先（地域の方との話し合い。三歳から七十歳までの参加者がある町内会旅行に適した場所はどこか。）

※次のようなテーマも楽しみながら取り組める。

・ディベート的テーマ：中学生に人気が高いのは、しょうゆラーメンか、みそラーメンか。

・ランキングテーマ：「本、ゲーム、運動」中学生のストレス解消に有効な順は？

■情意・方向性を示す話し出し

話し出しに短い表現を用いて、情意と話の内容の方向性を示し、話し合いを活性化させる。

「情意と方向性を示す「あいうえお」」

あ「あつ、なるほど（発見）」

ではフロアでの活動が重要である。他者の話し合いを評価しながら聞き、自分の話し合いに生かす。

■「話し合い」を支援するサポーター

話し合いのスムーズな進行、話し合いスキルの習得をサポートする「司会サポーター」「話者サポーター」を設ける。サポーターは、「話し合いマニュアル」に基づいて、「ストップ、サポーターします。話題の方向がずれています。」など、話を停止して具体的な助言をする。助言は、話し合いの支援であると同時に話し合いの評価であり、サポーター活動は自己に生かす評価活動となる。

※助言内容はメモに記して教師に報告することとし、教師の評価の一助とする。

■「話し合い」の進行、充実を促すメモと沈黙タイム

話し合い活動では、メモ記述（「事実と意見」「根拠と理由」「共通点と相違点」「共通点に内在する差異と相違点に内在する共感」など）がたいへん効果的である。また、話し合いには、時に個人で熟考するための沈黙の時間が必要である。「沈黙タイムは金」と指導する。ただし、思考の休憩時間にならぬよう、「沈黙タイムにはメモ」の指導を徹底する。メモの形式、活用には、「バタフライ・マップ法」(*)が参考になる。

*「バタフライ・マップ法」(藤森裕治著／東洋館出版社)

つながり広がる「話し合い」

「楽しかった」「また、やりたい」、そんな思いが話し合いに主体的に向かう原動力となる。話し合いを楽しむ教師の笑顔が話し合いの潤滑油になる。国語教室での話し合いが、他教科の授業や日常生活、社会生活での話し合いにつながり広がっていく。